

住民の米消費拡大による水田の保全について

～美しい東川を次世代に～

北海道東川町 藤井 貴慎



1 はじめに

東川町は北海道のほぼ中央に位置する町である。日本最大の国立公園である大雪山国立公園の一部を擁し、町域の約70%を森林が占めるなど自然豊かな町である。また、上水道がなく、住民全てが地下水で生活する全国的にも珍しい町である。基幹産業は農業で、特に水稻栽培が盛んである。2,342haにも及ぶ水田は、平野部の約6割を占め、大雪山を望む美しい水田風景が町の象徴的な景観となっている。東川町ではこの恵まれた自然や景観を背景に、写真写りの良い町をめざし「写真の町」を宣言しているほか、北海道ではじめて景観行政団体に認定されている。

東川町の最大の魅力ともいえるべき地下水での生活と美しい水田風景は、水田により支えられている部分が多く、東川町にとって水田は、住民やまちづくりにとって重要な意味を持っている。

本レポートでは、東川町における水田の役割と住民の関係を明らかにし、住民すべての財産ともいえるべき水田を次世代に引き継ぐために、住民の米消費拡大による水田保全として、①ひがしかわお米宣言による消費拡大への機運醸成、②総合的な学習の時間を利用した米を食べる習慣づけ、③栄養学習会による家庭からの米消費拡大、④体験や遊びを通じた水田への理解向上、⑤マニュアルによる飲食店等でのおいしいごはんの提供、⑥東川米マイスターによるアピールについて提案する。

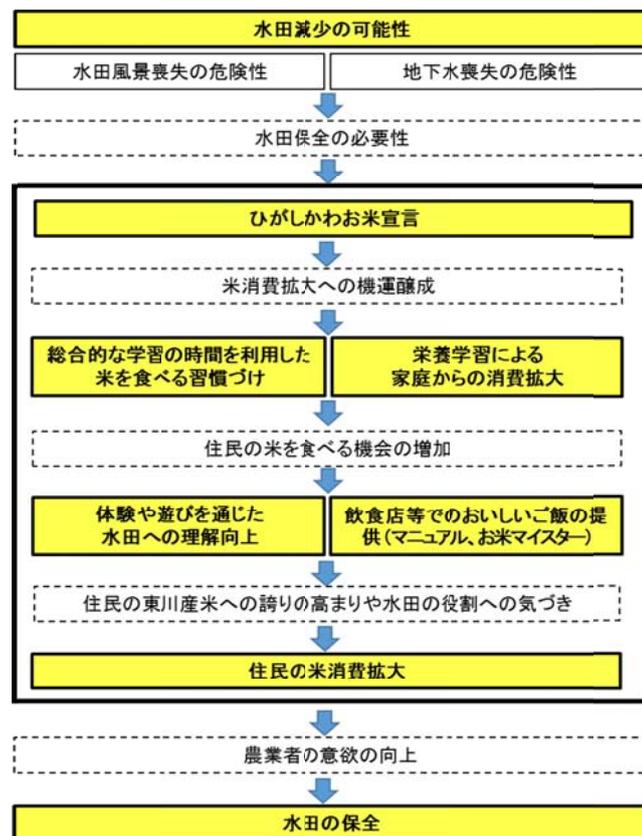


図1 提案の体系図

2 東川町の水田の現状と課題

(1) 東川町の水田の現状

東川町の基幹産業である農業は、水稻栽培を中心としている。東川村史には、入植翌年

の明治 29 年に米作りが始まったことが記録されている。寒さの厳しい北海道での米づくりは非常に厳しいものであったが、選抜や品種改良により寒冷地に強い品種が作り出されていった。明治 35 年には東川町から当時の北海道優良品種として認定された「黒毛」が選出され、明治 45 年には溝路整備により疎水条件が整ったこともあり稲作が本格化し、水田は 164ha まで広がった。東川町へは、香川県、富山県、愛知県などから入植があり、出身地ごとに水田造成が進められ、その過程において集落が生まれていった。このように、東川町は水田とともに町が生まれコミュニティが形成されてきたといえる。

現在の東川町の水田面積は 2,342ha (平成 26 年水稲作付) で、これは町域面積 24,706ha の 9.4%、森林を除く平野部の 55.3%にあたり、中心市街地や集落を形成している地域を除けば、ほぼ平野部一面に水田が広がっていることがうかがえる。また、石狩川水系の忠別川、宇朱別川水系の倉沼川が東西に流れ、山間から平野に出る場所は扇状地を形成している。泥炭土壌が少なく、大雪山を源とするミネラル豊富な清流と土壌に囲まれていることから、水稲栽培に適した好条件を備えた地域となっている。

主な水稲品種は「ほしのゆめ」、「ななつぼし」、「ゆめぴりか」である。特にななつぼし、ゆめぴりかは、米のねばりや食味に影響を与えるとされるアミロースやタンパク質の値が低く、日本穀物検定協会が公表している米の食味ランキングにおいて最高位となる特Aランクに指定されている。近年ではこれら新品種の登場により、北海道産米が見直されている。東川産米は、清らかでミネラル豊富な大雪山の伏流水で育てられていることや、JAひがしかわによる独自の品質管理、生産者による生産行程管理などの努力により、独自の販路を開拓するなど、他産地より比較的高い米価を保つなど消費者から好評を得ている。また、国の補助金制度により加工用米等に対し比較的高い補助金が交付されることから、生産数量目標は減少傾向にあるもの、水稲作付面積は増加傾向にある【表 1】。東川町は昭和 30 年代後半から昭和 50 年代にかけて圃場整備が行われている。その結果、用排水と併せて水田一枚当たり 30a を基本に基盤状に規則正しく整備され、平野部に連坦して広がるなど圃場条件が良いことから、耕作放棄地が存在しない。また、近年では一度都市部に出た農業者の子弟が戻り、農業を継ぐケースが増加するなど、他地域に比べ比較的好条件となっている。このように、東川町の水田は先人の労苦の上に作られ、現在では基幹産業を支える重要な農業基盤となっている。

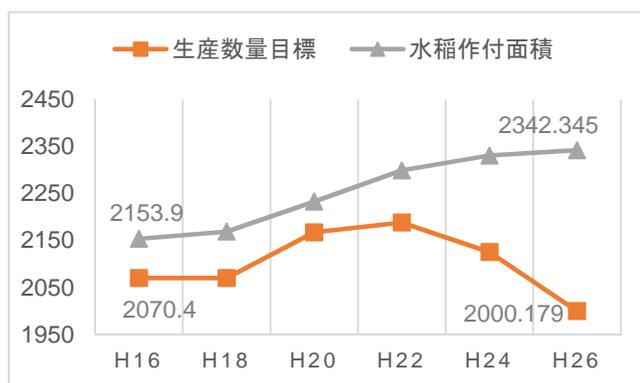


表 1 東川町における水稲作付面積の推移
※平成 26 年東川町調べ

(2) 水田減少の可能性

先述のとおり、現在のところ東川町の水稲栽培は恵まれた状況にある。しかし、このまま将来的にも安定した状況を保てるかといえは必ずしもそうとは言い切れない。日本国内における米の需要量は平成 8 年の 943.8 万 t に対し、平成 26 年では 778.2 万 t にまで減

少し、国民一人当たりの年間消費量も平成元年の70.4 kg/人から、平成24年には56.3 kg/人まで大きく減少するなど、米の需要、消費は年々減少傾向にある【表2】。食の多様化が進む現代においては、今後もこの傾向は続くものと推測される。また、TPPへの参加、国の交付金や主食米の生産数量目標の撤廃などにより、国内のみならず諸外国を相手にした競争の激化と米価の値下がり懸念されている。

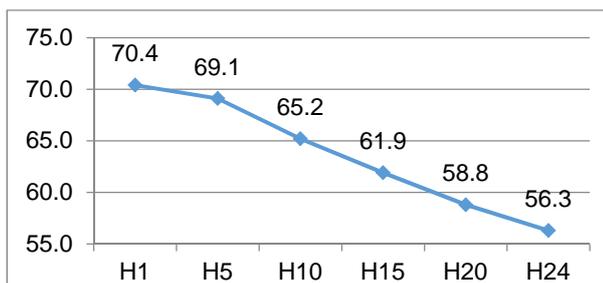


表2 米の一人当たり年間消費量推移
※平成24年度食料需給表(米)より調製
(平成25年農林水産省)

東川町に目を向けると、現在の農業者は60代以上が全体の68.8%、経営面積の63.9%を占め中核を担っていることがうかがえる。一方で20代~40代の農業者は全体の16.3%と少なく、現在60代以上農業者の後継者と併せても、30%程度の状況にある。しかしながら、各世代の

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	計
農業者数	4	12	29	41	103	87	276
うち後継者あり農業者数	0	0	0	6	39	1	46
経営面積 (ha)	38.0	214.0	539.3	578.6	1243.6	237.1	2850.6
平均経営面積 (ha)	9.5	17.8	18.6	14.1	12.1	2.7	10.3

平均経営面積は50~70代に比べ、20~40代の方が多く、東川町地域農業推進協議会策定の

表3 東川町における農業者の状況
※平成25年東川町調べ

「東川町地域水田農業ビジョン」で目標とする20haにも近づいているなど、少しずつではあるが、20代~40代の若年層に農地集積が進んでいることがうかがえる【表3】。このことは、先述の耕作放棄地が存在しないことから、少数ではあるが資本力を有する農業意欲の高い若年農業者がいること、水田面積の維持拡大がこれらの若年農業者の経営面積拡大によりカバーされていることを示している。前掲の東川町地域水田農業ビジョンでは、今後とも水稲生産を主にした水田利用を掲げているほか、平成28年度からは国営による水田の大区画化圃場整備も計画されている。しかしながら、農業者はこの先減少することが想定されることから【表4】、水田の受け手となる意欲の高い若年農業者の増加が重要となっている。

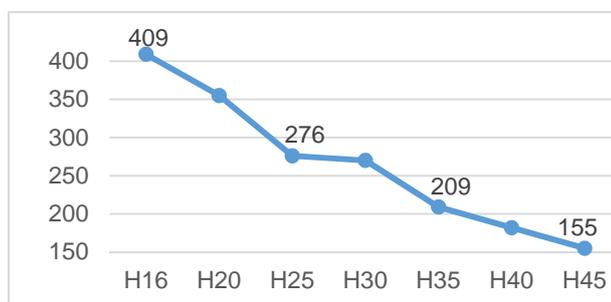


表4 東川町における農業者数の推移と推定
※平成26年東川町農業協同組合中心経営体数の推移より推計

このように、農業に関する将来的な不安要素は確実に存在し、東川町の水田は減少の危機にさらされているといえる。

3 水田が果たす役割

では、水田が減少することにより、東川町ではどのような影響や問題が生じるのか。水田が東川町において果たす役割について考えてみる。

(1) 農業基盤としての水田

水田と畑の一番の大きな違いは、土壌の上に水が張られている（湛水されている）ことである。稲は、茎葉から根への通気組織がよく発達し、大気中の酸素が植物体内を通じて根へ送られやすいため根が酸素欠乏になりにくく、水中でも根を腐らせにくいという性質がある。水田は水を溜めることにより、土壌中の酸素が少なくなり、有害な微生物や菌類は死滅するとともに、土の中にたまる有害物質が洗い流され、雑草の発生が抑えられる。このことにより、稲は他の植物との競争や有害な微生物に成長を脅かされるリスクが低くなる。また、一般的に酸性の土壌が多い日本において稲は中性の土壌を好むが、水田の土壌は酸素が不足することから pH が上昇し、稲の栽培に適した中性土壌を作り出す。このほか、水は比熱が大きく、特に北海道のような寒冷地においては水の保温効果が稲の成長を助ける。水が土壌を洗い流すことから稲の連作を可能にするとともに、稲は空気や水、土壌の中から天然の肥料ともいべき窒素やリン酸などを取りだして吸収利用することから、生産性が非常に高くなっている。この生産性の高さについては、関矢（1992:25-26）が、窒素肥料の使用量から米は小麦の3倍も効率がよいことを紹介している。東川町では、30a (3,000 m²) の水田1枚当たりから約1,720 kgの米がとれており、先ほどの国民一人当たりの年間消費量で割りかえすと3人分となる。このように、水田は非常に効率の良い食糧生産を行う農業基盤といえる。

(2) 東川町で水田が果たす役割

①地下水の涵養機能

水田が生産性に優れた農業基盤の一つであることを先に触れたが、水田の役割はそれだけではない。農業以外にも多くの役割を果たし、「水田の多面的機能」と呼ばれている。湛水による洪水調整機能や、生物のすみかとなる生態系の保全機能がそれにあたるが、地下水で生活する東川町にとって最も重要といえるのが地下水に対しての役割である。水田には地下水の涵養機能があり、関矢（1992:42）は、一般的な土壌の例として、垂直浸透が1日15 mmとして、稲作期間を120日とした場合、そのうち60%が暗渠排水や伏流水となって流れていき残りが地下水になるとしている。これを東川町に当てはめると、2,342haの水田で年間1,686万tの地下水を生み出していることとなる。

②地下水の浄化機能

もう一つの重要な機能として、地下水の浄化機能があげられる。東川町では地下水を飲用していることから、浄化機能は最も重要な役割と言える。水田特有の浄化機能としては、脱窒作用があげられる。これはアンモニアや硝酸が水田の土層を通過するときに、嫌気性菌により窒素ガスに変化して空気中に揮散させるものであり、畑にはない機能である。農業に広く使用される窒素肥料や家畜糞尿、生活排水に含まれるアンモニアは土壌中で硝酸性窒素を生成し、地下水汚染の原因となっている。硝酸性窒素を多く含む水を飲むと、血液中に酸素を運ぶ役割をしているヘモグロビンと反応してチアノーゼを起こすメトヘモク

ロビン血症を引き起こす可能性が高くなる。特に乳幼児には「ブルーベイベー症候群」として命に係わる可能性がある。関矢（1992:49-50）は、農林水産省が行った広範な農地周辺の地下水調査の結果を上げ、地下水の涵養力の低い畑地においては硝酸性窒素の値が高かったことに対し、水田地帯ではほとんど基準値以下であったことを記述しており、このことから水田が果たす地下水の浄化機能の高さがうかがえる。地下水の保全には森林が果たす役割が非常に大きいとはいえ、東川町は市街地や集落の周囲を水田が取り囲むような土地利用となっていることから、飲料水としての地下水の水質保全という観点からも、水田が非常に重要な役割を果たしているといえる。

③田園風景の形成

また、もう一つの特徴的な役割が農村景観の形成である。稲は縄文時代の後半にはすでに日本に伝来していたと考えられており、日本人にとっては、田園が広がる農村風景が心の原風景となっているのではないだろうか。特に東川町では、水田とともにコミュニティが形成されてきたこともあり、美しい大雪山を望む田園風景が多くの人にとって心の安らぎを生む故郷の風景として印象付けられている。また、この美しい景観にあこがれて都市部から移住する人も多く、平成24年に行われた町民アンケートでは約60%の住民が東川の自然や風景に魅力を感じていると回答している。このことから大雪山を望む一面に広がる田園風景が東川町の大きな魅力となっているとともに、視覚的な「ひがしかわらしさ」を生み出しているといえる。

④水田と住民の関わり

このように、水田は多くの役割を果たしている。特に東川町においては、美しい田園景観を作り出しているだけでなく、飲料水としての地下水を守っており、地下水で生活する町を支えていることがわかる。東川町における水田は単に農業の生産基盤としてだけでなく、住民の生活や東川町そのものを作り出す重要な要素となっているといえる。水田の減少は、基幹産業の衰退だけでなく、美しい田園風景や安心安全な地下水の喪失にもつながるのである。従って、水田は住民全ての資産であるとともに、未来に引き継ぐべき財産であるといえる。しかし東川町で暮らす住民自身がこのことに気づかなかつたとしたらどうなるだろうか。「水田は農業者が守っていけばいい。」と考えているようでは問題である。住民自身も、自分の生活を守るために水田減少を自分の問題として捉える必要がある。水田を維持していくためにはまずは米の消費を拡大することが重要である。水田保全には資金援助等による新規就農者の確保育成など、直接的な農業施策が必要なのはもちろんであるが、住民自身も故郷の風景やおいしい地下水を失わないようにするために、自ら米を消費しながら東川産米に対して誇りを持つとともに、他地域の人に自信をもって薦められるようになること、その過程を通じて水田の役割に気づいていくことが必要ではないだろうか。そしてそのことが、直接水田を維持する農業者の意欲を高め、ここで農業を続けたい、始めたいという若年農業者を育てる一つの要因にも繋がるのではないだろうか。

4 東川産米消費に関する従来の取り組み

では、米の消費拡大にはどのような方法が考えられるのか。まずは従来の取り組みを整

理する。消費拡大には、加工による手法も考えられるが、加工用米は主食用米よりも市場価格が低く、国からの非主食米生産への助成が減少した場合生産を維持していくことが難しくなることが考えられるため、ここでは主食米による取り組みについて整理していく。

(1) お土産品による東川産米のアピール

東川町内では、東川産米をアピールするため2種類の土産品が企画販売されている。そのうちのひとつである「雫のゆめセット」は、真空パックにした「ゆめぴりか」450gと、東川町の地下水「大雪旭岳源水」500ml入りペットボトルをセットにしたもので、JA ひがしかわが手掛けている【写真1】。東川産米を地下水で炊き上げ味わうことができるようになっており、平成26年5月に販売



写真1 雫のゆめセット

以来、同年10月末現在6,116セットを販売している。住民に地域外の人への贈答品として利用されるケースもあるが、現在のところ多くは町等が米のPRのために使用している。同様の商品に、株式会社東川振興公社が販売する米缶（150mlサイズの缶に無洗米を詰めた商品）があり、両者ともにサイズや料金が手ごろであり非常に有益な商品となっている。しかしながら、贈る側に東川産米に関する十分な知識がないことから、ただ渡すだけの取り組みに終始しており、十分にそのおいしさや魅力が伝わっていない傾向にある。東川産米をアピールするうえでは今後とも必要な商品であると考えられるが、まずは東川産米を実際に味わってもらうこと、そしてそのおいしさや特徴を贈る側が十分に伝えられるようになることが重要であり、そこではじめてより価値のある商品になると考えられる。

(2) 飲食店での東川産米利用

飲食店においても多くの店が東川産米を利用している。しかしながら、どの飲食店も東川産米利用について積極的にアピールしておらず、また、提供の仕方に工夫もないことから、他産地米利用との差別化が図られず東川産米を上手にアピールするには至っていない。飲食店での利用は消費の拡大につながるだけでなく、来店者においしさをアピールするうえで非常に有益な方法であることから、おいしいごはんの提供について工夫するとともに、積極的な東川産米利用をアピールすることが必要である。

(3) 従来の取り組みのまとめ

これらのように、東川産米の消費拡大に向けた取り組みは各主体において一定程度行われているが、取り組みがバラバラであり十分な効果を上げているとはいえない。特に消費拡大に向けた東川産米のアピールは、媒体や機会は用意されているが、贈る側や提供する側に十分な知識がないことからせっかくの取り組みを活かし切れていない状況にある。東川産米は、魚沼産コシヒカリのような全国的なブランドには及ばないものの、自然豊かな環境で育てられていること、そしてなにより、東川町にはおいしい地下水があるなど、他地域には真似できないセールスポイントが多くある。消費を拡大していくためには、生産者が安心して安全な米を生産し、販売者がアピールを続けていくことはもちろんであるが、まずは贈る側としての住民や料理を提供する飲食店が東川産米のおいしさや地域の強みを

知ること、そして誇りをもって他にすすめられるようになることが何より重要なのではないだろうか。またそのことが住民の水田の役割への気づきを生み、多くの人が東川の水田に目を向けさらには農業者の意欲の向上へとつながるのではないだろうか。

5 住民の米消費拡大による水田保全の取り組み

ここからは、住民が米消費拡大を通じて水田の役割を理解し、水田を保全していく方法について考えていく。

住民の消費拡大だけで、東川町の水田全てを保全することは難しいかもしれないが、「3水田が果たす役割」で記述したとおり、地下水で生活する東川町では、水田は住民やまちづくりにおいて非常に重要な意味を持っている。このことから、まずは住民が米への理解を深め、自らが喜んで消費するとともに、東川産米への誇りを高め、自ら町外の人へすすめたり、地域外の人を知ること、食べてみたいと思わせること、そしてたとえどこで暮らすこととなったとしても将来にわたって東川町の水田を思いながら、東川産米を食べ、広めていくことができるような方法を考える。

(1) ひがしかわお米宣言による消費拡大への機運醸成

食文化が多様化している現代では、単に町民に消費を呼びかけてもなかなかうまくいかないものである。まずは、住民が取り組みの意義や妥当性を感じ、東川町全体で米を消費していくことができる機運を醸成するために、議会の採択を経て「東川町米食推進宣言（通称：ひがしかわお米宣言）」【図2】を行う。町は宣言を基に、①米食の推進、②水田の役割の理解向上、③地域内消費の拡大を柱にした、「米食推進計画」を策定し取り組みを展開する。計画には、米の消費や保全すべき水田面積について調査を行い目標を定めるほか、水田の浄化機能を十分に活用するため、米の消費拡大のほか、化学肥料や農薬の低減、有機栽培等環境保全型農業も推進する。

東川町米食推進宣言(通称:ひがしかわお米宣言)

米は日本人にとって古来より愛されてきた主食であり、米を生み出す水田は、日本人の心の原風景といえる田園風景だけでなく、生物多様性や洪水調整など、わたしたちの生活と密接に結びついています。

東川町にとっての水田は、美しい田園風景を生み出すだけでなく、その水質浄化機能により、私たちの生活を支える豊かな地下水を守るなど、住民すべての財産となっています。

私たちは、いつまでも誰かが心に思いを刻む東川町を次の世代に受け継ぐために、水田に感謝し、守り続ける責務があります。

私たちはここに、水田を守り、美しい田園風景と地下水を次世代に伝えるために、東川産米の消費拡大に努めることを宣言します。

- 一、わたしたちは、日常の食生活を見直し、米を食べる機会の増加に努めます。
- 一、わたしたちは、水田が果たす役割を理解し、水田保全に協力します
- 一、わたしたちは、積極的な東川産米の消費拡大に努めます。

図2 ひがしかわお米宣言

(2) ひがしかわお米宣言に基づく施策の展開

①総合的な学習の時間を利用した米を食べる習慣づけ

住民の米消費を拡大するためには、まずは米を食べる機会を増やすことが必要である。特に、これから大人になる子どもたちには将来にわたって米を食べる習慣を身につけてもらいたい。そのために、小学校、中学校の授業の中に「ご飯の授業」を設け、栄養価の高さや腹もちのよさなどご飯を中心とした和食に関する学習を行う。併せて三食を食べることの重要性について学習し、米を食べる回数を増やすことを目指す。学習では、米に対す

る知識を身につけるため、小学校、中学校では総合的な学習の時間を利用し、食物栄養学の有識者や地域の農業者から話を聞きながら学年に応じて食事の重要性、米の栄養価、効果的な食事の仕方や、水田と東川の歴史などを学んではど

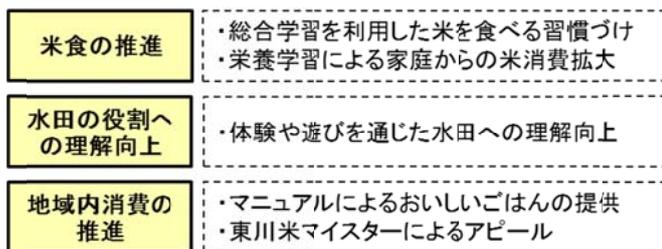


図3 推進施策の体系図

うか。東川町では、小学校、中学校ともに給食でも東川産米導入を進めており、基本的には週5食とも米飯を基本としている。小学校、幼児センターではランチルームに一堂に会して給食をとることから、この時間を利用して給食で提供される米の生産者から苦労や工夫について話を聞くことも効果的である。このほか、まだ就学前の子どもが通う幼児センターでは、園児が米に興味を持つよう、愛らしいJAひがしかわのキャラクター「てっぺんくん」に登場してもらい、一緒に給食を取ったり、お米に関するクイズや絵本を紹介するなどの取り組みを進めたい。これらの学習は、子どもたちが農業に関心をもつきっかけにもなり、将来の農業後継者の育成にも寄与するものである。

②栄養学習会による家庭からの米消費拡大

子どもたちが米に対する理解を深めたとしても、家庭で米を食べる機会を得られなければ習慣としては根付かない。子どもたちの学習に続き、家庭でも米への理解を深めるため、米を題材にした栄養学習を行う。

栄養学習は、町が月1回実施している栄養学習会に取り入れて行う。現在行われている栄養学習会は、平均参加者が15名程度とあまり多くない。これは毎年同じ内容を繰り返しているだけなど、対象となる年齢層や目的がしっかりと設定されていないことが原因と考えられる。このことから、旭川市内の大学（食物栄養学科）と連携し、スポーツ少年団や中高生運動部の保護者向け、高齢者向けなどテーマや対象者ごとの内容を検討し、より多くの人に興味の持つ内容として実施してはどうか。しかしながら、せつかく米に関する知識や理解を得たとしてもおいしくないと消費には繋がりにくい。近年都市部では炊飯にミネラルウォーターを使用する人も多いが、東川町では全戸が地下水を利用していることから、誰もが塩素が含まれていないおいしい水でご飯を食べることができる。炊飯には、洗った米を少なくとも30分程度水につけておくことで味が良くなるといわれている。これは、米粒の外側の細胞はもちろん、中心部の細胞にまで詰まっているでんぷんに十分に水をいきわたらせるためである。この時、水温が高いと、米が発酵し食味が悪くなることが分かっている。この点地下水は水温が一定であるだけでなく、特に夏場は水道水よりも水温が低くなる傾向があるため、おいしいご飯の炊飯に適しているといえる。このような東川町の特徴を十分に生かし、地下水を利用したおいしいお米の炊き方も学習会に取り入れることで、住民がより積極的に米を食べることができるようになるのではないだろうか。

これらのプログラムは、子どもたちへの学習が成長に伴い一連の効果となってあらわれるとともに家庭での食事へとつながるよう、食育に関する専門家を交え、継続性のあるプログラムとして検討したい。経費は既存の学校教育や保健指導の一部として行うことから、

従来の予算を活用することで、十分な活動を行えると考えている。

③体験や遊びを通じた水田への理解向上

単に知識として理解を得るだけでなく、子どもたちが自らの体験を通じて米に対する興味とそこから米が生まれる水田と自分たちの関わりについて感覚的に意識していくことも重要ではないだろうか。東川町では、平成26年に東川小学校を学童保育施設と併せて移転改築した際、1.2haの体験水田を隣接地に整備している。体験水田では、田植えや稲刈り体験等を予定しているが、学童保育施設に近いことから、放課後子どもたちが田んぼで遊ぶ機会を提供してはどうか。自分たちが子どものころは、あぜ道を走りまわり鬼ごっこをしたり、田んぼにいるトンボやカエルを捕まえたりして遊んだものである。たまにバランスを崩し、あぜから田んぼに落ちて泥まみれになったりもしたが、夏には温かくなった水とやわらかな泥の感触、土の匂い、遊びながら見た風景が故郷を感じるとても良い思い出となっている。今の子どもたちも田んぼと触れ合える機会ができるよう体験水田を遊び場として開放し、虫取りなど自由に遊べる場にするすることで、水田に住む動植物や稲の日々の成長を間近に感じられ、米や水田に対する愛着を育てることにつながるのではないだろうか。このほか、田植え体験や稲刈り体験に併せ、農業者から田んぼの仕組みを学ぶ機会を設け、水田の役割を学ぶ。水田の中には雑草がないことや落ち口から流れる水は澄んだきれいな水になっていることを実際にみながら、水田の地下水の涵養や浄化機能について学ぶ。体験の後のお弁当は当然東川産米のおにぎりを提供する。作業後の空腹に青空の下あぜに腰を掛けたべるおにぎりは、格別なものを感じるだろう。東川の地下水を併せて飲みながら眺める風景は、水田が自分たちが食べるおいしいごはんを地下水を守っていることを鮮明な記憶として残してくれるだろう。

④マニュアルによる飲食店等でのおいしいごはんの提供

東川産米の消費拡大をさらに全町的なものとするためには、家庭だけでなく、飲食店や宿泊施設でも東川のおいしいごはんが食べられることも重要である。先述した過去の飲食店での取り組みの反省点も踏まえ、商工会やJAひがしかわが中心となり、東川産米の利用協定を締結し、米の保管、地下水を利用した炊飯、炊飯後の保管についての基準やマニュアルを検討し、協定店が一定以上のおいしいごはんを提供する取り組みを行う。先述のとおり米の炊飯には地下水が適している。飲食店では塩素滅菌が義務付けられているが、もともと良質であることから、水道水に比べ非常にわずかな塩素しか使用されておらず他地域よりもおいしいご飯が提供できる。また米は精米後保存期間が長くなるにつれ味が劣化することが知られている。これは、胚乳部表面が直接空気にふれることにより、脂質の変敗が進み古米臭の発生と硬化が始まることによるものといわれている。このことから、東川産米の集出荷を担うJAひがしかわが低温貯蔵庫において玄米を保管し、年間を通して一定量ずつ協定締結者に供給する仕組みをつくることにより、東川町内の飲食店ではいつでもおいしい東川産米のごはんを提供できる仕組みを作り上げる。

⑤東川米マイスターによるアピール

従来の取り組みでは、せっかくの東川産米の利用をアピールしきれていないという課題があった。東川産米をアピールし、おいしいごはんの魅力を知ってもらうためには、提供

する側が十分にその魅力を伝えられることが重要である。

東川産米の魅力は、食味はもちろん、育てられた自然豊かな環境や、生産行程管理による安心安全である。飲食店ではこれらのことをしっかりと利用者に伝えられるようになる必要がある。このことから、東川産米利用協定への参加には、米マイスターの有資格者等を招き、米に関する研修を義務付ける。研修では、東川町内の農業者、観光ガイドや地下水の専門家なども加え、東川の風土や歴史なども併せて学び、より深く米の魅力を伝えることができるよう工夫する。これらの研修プログラム修了者は「東川米マイスター」として認定し、取り組みのアピールと一定以上のレベル確保につなげる。

取り組みにより、店主や客、生産者の会話が生まれ東川産米への誇りや水田の役割に関する共通認識が高まっていく。また、地域外から来た人がその光景を間近にしたり、伝え聞くことで、地域外の人へも東川ではおいしいお米が食べられることのアピールにつながり、東川に来て食べてみたい、住んで食べてみたい、それが無理だとしてもせめて東川の米を食べてみたいとの思いにつなげていく。

6 おわりに

東川町は美しい田園風景のなか、地下水で生活する全国的にも珍しい町である。この地下水は、水田により守られてきたといっても過言ではない。もし水田が減少してしまえば、美しい田園風景はもちろん、この貴重な地下水での生活が失われてしまう恐れがある。だからこそ、住民誰もが自らの問題として水田減少に向き合うため、住民による米の消費拡大が重要なのである。住民一人ひとりが消費する米の量自体は微々たるものかもしれない。

しかし、町全体で東川産米の消費と誇りを高め、米を育む水田への理解が深まれば、直接的に水田を維持する農業者の意欲を高め、若き農業者を育てることへも繋がっていくのである。水田とともに生まれ、育ったまちが、これからも水田とともに歩み、美しい東川町がいつまでも多くの人の故郷として受け継がれていけるよう微力ながら努力していきたい。



写真2 大雪山を望む田園風景

(参考文献)

- 関矢信一郎（1992）『水田のはたらき』家の光協会
- 八木宏典監修（2014）『図解知識ゼロからのコメ入門』家の光出版
- 貝沼やす子（2012）『お米とごはんの化学』建帛社
- 横尾政雄（1989）『米のはなし〈1〉』技報堂出版
- 富山和子（1993）『日本の米』中央新書
- 東川村史編集委員会（1954）『東川村史』東川村